

いじめと差別意識の関係に関する研究

山 田 智 之*・関 本 恵 一**

(平成29年9月6日受付；平成29年11月22日受理)

要 旨

本研究は「いじめ」と「差別意識」の関係について検討を行ったものである。本研究の調査は、大学生を対象に幼稚園・保育園・小学校・中学校・高等学校時代の「いじめ」について、質問紙による回顧調査によって行った。本研究の結果、いじめ経験の相違（被害のみ経験、加害のみ経験、被害・加害経験、認知のみ経験）が差別意識への影響の仕方に違いがあり、差別意識の違いによりいじめ経験が異なることが明らかになった。そして、差別意識といじめは強い関係があり、いじめ問題を深刻化させている一つの要因となっていることが明らかになった。このことから、教育の現場では、子どもたちの差別意識を払拭させる取り組みが重要となると考えられる。

KEY WORDS

いじめ 差別意識

1 問題と目的

文部科学省（2016b）によれば、平成27年度の日本の小・中・高等学校及び特別支援学校におけるいじめの認知件数は224,540件（前年度188,072件、前々年度185,803件）と前年度より36,468件増加し、児童生徒1,000人当たりの認知件数は16.4件（前年度13.7件、前々年度13.4件）となった。学校段階ごとのいじめの認知件数は、小学校151,190件（前年度122,734件）、中学校59,422件（前年度52,971件）、高等学校12,654件（前年度11,404件）、特別支援学校1,274件（前年度963件）となっており、いずれも増加傾向にある。いじめを認知した学校数は23,528校（前年度21,643校）であり、全学校数に占める割合は62.0%（前年度56.5%）である。このうち、現時点で解消しているいじめの件数の割合は88.6%（前年度88.7%）となっている。いじめの発見のきっかけは、「アンケート調査など学校の取組により発見」が51.4%（前年度50.9%）と最も多く、続いて「本人からの訴え」17.2%（前年度17.3%）、「学級担任が発見」11.8%（前年度12.1%）となっている。いじめられた児童生徒の相談状況は「学級担任に相談」が74.7%（前年度73.6%）と最も多い。いじめの様態のうちパソコンや携帯電話等を使いたいじめは9,149件（前年度7,898件）で、いじめの認知件数に占める割合は4.07%（前年度4.20%）となっている。ベネッセ教育総合研究所（2003）は、大学生に小・中・高等学校時代の各学校段階での「いじめ」について調査を行い、「いじめ」があったのは小・中学校時代では8割を超えるが、高等学校時代では3割に激減していることを明らかにしている。いじめられた体験・いじめた体験については、ともに小学校時代が約6割と高く、中学校時代で約4割、高等学校時代では3割前後と減少傾向を示し、「いじめ」を傍観したことについては、小学校・中学校時代で約9割、高等学校時代で8割強の割合であることを明らかにしている。このような、いじめの発生の割合の違いについては、文部科学省（2016b）の平成27年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」は学校の教員の認知件数であり、ベネッセ教育総合研究所（2003）の調査は、いじめを経験した大学生を対象に行った回顧調査であることが考えられる。

大原・田中（2015）は、大学生に対する回顧調査によって、学校段階が進むにつれいじめ内容に質的な変化が見られたこと等を明らかにしている。日本におけるいじめ現象について、山田（2016）は、日本人特有の差別意識があると指摘している。そして「差別意識」を生む要因には、「偏見」や「無知から派生する恐怖」、「人間が本来持つ社会的欲求」など様々なものがあると述べている。

そこで、本研究では、大学生を対象に小・中・高等学校でのいじめについて回顧調査を行い、いじめと差別意識について検討を行う。

2 方法

(1) 調査対象と調査方法

関東及び甲信越の大学・大学院に在籍する大学生・大学院生500名を対象に2016年5月～8月の間にREAS（リアルタイム評価支援システム）を活用したWEBによる集合調査を行った。被調査者の多様性を確保するために、人文科学系統（文学・史学・哲学・心理学など）、理学系統（数学・物理学・化学・生物・地学など）、工学系統（機械工学・電気通信工学・土木建築工学・応用化学・経営工学など）、農学系統（農学・農業工学・農芸化学・獣医学・林学・水産学など）、家政系統（家政学・食物学・被服学・住居学・児童学など）、教育系統（教育学・体育学など）、芸術系統（美術関係・デザイン関係・音楽関係・演劇関係・写真関係など）、総合学際系統（教養学・総合科学・国際関係・人間関係科学など）を有する国立・私立大学8校に調査を依頼し、授業及び講義の時間を利用して調査依頼を配布し、その場でスマートフォンなどを活用し回答を得る方法で実施した。調査を依頼した大学の入学試験の難易度別学校数は、上位校（SS \geq 55）2校・中位校4校（SS \geq 45）・下位校2校（SS \leq 45）であった（代々木ゼミナール, 2014）。有効回答のあった364名（男子学生：194名, 女子学生：170名）の調査対象者の属性は表1に示す通りであり、概ね十分なサンプルの代表性が確保された（有効回答率72.8%）。

(2) 調査内容

いままでに「自分が受けたいじめ」及び「自分が行っていたじめ」「他人が他人に対して行い、自分が認知したいじめ」について、時期（「幼稚園・保育園」～「高等学校3年生」）、様態（「言語的：暴言、脅し、冷やかし、からかい、陰口、あだ名など」「身体的：暴力、ものをぶつけるなど」「強要的：たかり、やらせ、ストーカー、金品の要求」「性的：ズボン・スカートおろし、スカートめくりなど」「物品的：ものを隠す、こわす」「社会・ネットワーク的：仲間はずれ、無視、〇〇菌、ネットいじめなど」「その他」）、いじめの解決と解決のために対応してくれた人物などについて調査を行った。

また、差別意識尺度を作成するための13項目（表7の項目の他5項目）を独自に作成し「そう思わない（1点）」～「そう思う（5点）」までの5件法によって調査を行った。

表1 調査対象者の属性

| | | 度数 |
|---------|--------------------------------------|-----|
| 学校段階 | 大学生 | 337 |
| | 大学院（修士課程）生 | 22 |
| | 社会人 大学生 | 3 |
| | 社会人 大学院（修士課程）生 | 2 |
| 学部・学科系統 | 人文科学系統（文学・史学・哲学・心理学など） | 116 |
| | 理学系統（数学・物理学・化学・生物・地学など） | 39 |
| | 工学系統（機械工学・電気通信工学・土木建築工学・応用化学・経営工学など） | 92 |
| | 農学系統（農学・農業工学・農芸化学・獣医学・林学・水産学など） | 18 |
| | 家政系統（家政学・食物学・被服学・住居学・児童学など） | 1 |
| | 教育系統（教育学・体育学など） | 82 |
| | 芸術系統（美術関係・デザイン関係・音楽関係・演劇関係・写真関係など） | 4 |
| | 総合学際系統（教養学・総合科学・国際関係・人間関係科学など） | 12 |
| 学年 | 1 学年 | 36 |
| | 2 学年 | 146 |
| | 3 学年 | 92 |
| | 4 学年 | 90 |
| 性別 | 男性 | 194 |
| | 女性 | 170 |
| 年齢 | 10歳代 | 114 |
| | 20歳代 | 245 |
| | 30歳代 | 5 |
| 学校所在地 | 北海道・東北（北海道・青森県・岩手県・宮城県・秋田県・山形県・福島県） | 1 |
| | 南関東（東京都・埼玉県・千葉県・神奈川県） | 305 |
| | 北越（新潟県・富山県・石川県・福井県） | 51 |
| | 東海（岐阜県・静岡県・愛知県） | 6 |
| | 中国（鳥取県・島根県・岡山県・広島県・山口県） | 1 |

3 結果

(1) いじめの経験

いじめの経験について、いじめ被害のみの経験者は94名（25.8%）、いじめ加害のみの経験者は37名（10.2%）、いじめ被害及び加害の両方の経験者は82名（22.5%）、他人が他人にしたいじめの認知のみ経験者は92名（25.3%）、いじめ未経験者は59名（16.2%）であった。

いじめを経験した時期については、表2に示す通りであり、いじめ被害経験、いじめ加害経験においては、男女ともに小学校段階では小学6年生、中学校段階では中学2年生が高い値を示し、高等学校段階になると減少していた。いじめ認知経験は、男女ともに小学校段階では小学6年生、中学校段階では中学1年生が高い値を示し、高等学校段階になると減少していた。

経験したいじめの様態については、表3に示す通りであり、被害・加害・認知経験ともに、言語的（暴言、脅し、冷やかし、からかい、陰口、あだ名など）、社会・ネットワーク的（仲間はずれ、無視、〇〇菌、ネットいじめなど）いじめの2つの様態が多く、2つの様態で全体の69.9%を占めていた。続いて、身体的（暴力、ものをぶつけるなど）、物的（ものを隠す、こわす）いじめの2つの様態で全体の23.6%、強要的（たかり、やらせ、ストーカー、金品の要求）、性的（ズボン・スカートおろし、スカートめくりなど）いじめの2つの様態で全体の6%となっていた。

表2 いじめを経験（被害・加害・認知）した時期

| | | 保 幼 育 稚 園 園 | 小学 1年生 | 小学 2年生 | 小学 3年生 | 小学 4年生 | 小学 5年生 | 小学 6年生 | 中学 1年生 | 中学 2年生 | 中学 3年生 | 高校 1年生 | 高校 2年生 | 高校 3年生 |
|-----------|----|-------------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|
| いじめ被害経験 | 男性 | 2 | 15 | 14 | 16 | 26 | 19 | 25 | 23 | 24 | 18 | 5 | 7 | 3 |
| | 女性 | 8 | 13 | 8 | 22 | 18 | 18 | 28 | 27 | 29 | 23 | 5 | 6 | 3 |
| | 合計 | 10 | 28 | 22 | 38 | 44 | 37 | 53 | 50 | 53 | 41 | 10 | 13 | 6 |
| いじめ加害経験 | 男性 | 3 | 6 | 6 | 11 | 15 | 21 | 21 | 23 | 23 | 11 | 3 | 5 | 5 |
| | 女性 | 0 | 3 | 6 | 8 | 8 | 13 | 15 | 10 | 11 | 7 | 4 | 1 | 1 |
| | 合計 | 3 | 9 | 12 | 19 | 23 | 34 | 36 | 33 | 34 | 18 | 7 | 6 | 6 |
| 他人へのいじめ認知 | 男性 | 5 | 11 | 14 | 25 | 37 | 52 | 66 | 73 | 77 | 66 | 27 | 26 | 18 |
| | 女性 | 1 | 5 | 13 | 22 | 31 | 48 | 55 | 75 | 64 | 55 | 21 | 14 | 11 |
| | 合計 | 6 | 16 | 27 | 47 | 68 | 100 | 121 | 148 | 141 | 121 | 48 | 40 | 29 |
| 総 計 | | 19 | 53 | 61 | 104 | 135 | 171 | 210 | 231 | 228 | 180 | 65 | 59 | 41 |

表3 経験したいじめの様態

| | | 言 語 的 | 身 体 的 | 強 要 的 | 性 的 | 物 品 的 | ト 社 会 ・ ネット | そ の 他 | 合 計 |
|-----------|----|--------|--------|-------|-------|--------|-------------|-------|---------|
| いじめ被害経験 | 男性 | 59 | 27 | 2 | 6 | 16 | 35 | 1 | 146 |
| | 女性 | 73 | 12 | 3 | 2 | 23 | 56 | 0 | 169 |
| | 合計 | 132 | 39 | 5 | 8 | 39 | 91 | 1 | 315 |
| | % | (41.9) | (12.4) | (1.6) | (2.5) | (12.4) | (28.9) | (.3) | (100.0) |
| いじめ加害経験 | 男性 | 55 | 20 | 4 | 7 | 11 | 30 | 0 | 127 |
| | 女性 | 39 | 0 | 0 | 0 | 2 | 30 | 1 | 72 |
| | 合計 | 94 | 20 | 4 | 7 | 13 | 60 | 1 | 199 |
| | % | (47.2) | (10.1) | (2.0) | (3.5) | (6.5) | (30.2) | (.5) | (100.0) |
| 他人へのいじめ認知 | 男性 | 128 | 56 | 13 | 12 | 36 | 70 | 1 | 316 |
| | 女性 | 116 | 32 | 6 | 12 | 27 | 86 | 2 | 281 |
| | 合計 | 244 | 88 | 19 | 24 | 63 | 156 | 3 | 597 |
| | % | (40.9) | (14.7) | (3.2) | (4.0) | (10.6) | (26.1) | (.5) | (100.0) |
| 総 計 | 合計 | 470 | 147 | 28 | 39 | 115 | 307 | 5 | 1111 |
| | % | (42.3) | (13.2) | (2.5) | (3.5) | (10.4) | (27.6) | (.5) | (100.0) |

いじめ被害者に、いじめの加害者を尋ねたところ同級生と回答した者が139名（74.33％）であり、続いて同期生18名（9.63％）、上級生12名（6.42％）、友だち12名（6.42％）となっていたことから同じ学級内においていじめが発生していることが予測された。一方、いじめ加害者にいじめた相手を尋ねたところ、同級生と回答した者が96名（84.21％）となっており、続いて友だち11名（9.65％）、同期生4名（3.51％）であり、いじめ被害者の回答と一致していた（表4）。さらに、いじめの認知者に被害者と加害者を尋ねたところ、同級生が同級生に対して行ったいじめが203件（81.85％）であり、続いて友だちが友だちに対して行ったいじめが17件（6.85％）、上級生が下級生に対して行ったいじめが6件（2.42％）、同級生が同期生に対して行ったいじめが5件（2.02％）となっており、同じ学級内においてほとんどのいじめが発生していることを裏付けた（表5）。

表4 加害者と被害者の属性 (1)

| | いじめ被害者 からみた いじめ加害者 | | いじめ加害者 からみた いじめ被害者 | |
|-----|--------------------------|----------|--------------------------|----------|
| | 度数 | % | 度数 | % |
| 同級生 | 139 | (74.33) | 96 | (84.21) |
| 同期生 | 18 | (9.63) | 4 | (3.51) |
| 上級生 | 12 | (6.42) | | |
| 下級生 | 1 | (.53) | 1 | (.88) |
| 教員 | 2 | (1.07) | | |
| 友だち | 12 | (6.42) | 11 | (9.65) |
| その他 | 3 | (1.60) | 2 | (1.75) |
| | 187 | (100.00) | 114 | (100.00) |

表5 加害者と被害者の属性 (2)

| | | いじめ認知者 からみた 加害者→被害者 | |
|---------|-----|---------------------------|---|
| | | 度数 | % |
| 同級生→同級生 | 203 | (81.85) | |
| 同級生→同期生 | 5 | (2.02) | |
| 同級生→上級生 | 1 | (.40) | |
| 同級生→下級生 | 1 | (.40) | |
| 同期生→同級生 | 2 | (.81) | |
| 同期生→同期生 | 3 | (1.21) | |
| 同期生→後輩 | 1 | (.40) | |
| 上級生→同級生 | 2 | (.81) | |
| 上級生→同期生 | 2 | (.81) | |
| 上級生→先生 | 2 | (.81) | |
| 上級生→下級生 | 6 | (2.42) | |
| 下級生→下級生 | 3 | (1.21) | |
| 友だち→友だち | 17 | (6.85) | |
| | 248 | (100.00) | |

(2) 経験したいじめの相談者と解決

経験したいじめの解決状況といじめの相談相手について尋ねた。いじめの相談相手については複数の回答を可として調査を行ったところ表6に示すような結果となった。いじめ被害者においては、教員（学級担任）に相談した者が50名と最も多く、このうち44件（88.00％）が解決にいたっていた（ $\chi^2=80.841$, $df=2$, $p<.001$ ）。次いで友だちに相談した者が42名であり、このうち38件（90.48％）が解決にいたっていた（ $\chi^2=69.858$, $df=2$, $p<.001$ ）。また、

表6 経験したいじめの相談者と解決

| 相談相手 | | 教員 (学級担任) | | 教員 (管理職) | | 教員 (担任以外) | | 友達 | | 同級生 | | 上級生 | | 保護者 | | 地域の人 | | その他の人 | | 相談相手 なし | |
|----------------------------------|----------|--------------|---------|-------------|----------|--------------|----------|-----------|----------|-----------|----------|-----|----------|-----------|----------|------|----------|-------|----------|------------|---------|
| | | 度数 | % | 度数 | % | 度数 | % | 度数 | % | 度数 | % | 度数 | % | 度数 | % | 度数 | % | 度数 | % | 度数 | % |
| いじめ被害者 が受けたいじ めの解決の認 知 | 解決した | 44 | (88.00) | 7 | (87.50) | 15 | (83.33) | 38 | (90.48) | 17 | (85.00) | 1 | (50.00) | 34 | (94.44) | 1 | (100.00) | 3 | (100.00) | 25 | (83.33) |
| | 解決しなかった | 4 | (8.00) | 1 | (12.50) | 2 | (11.11) | 2 | (4.76) | 2 | (10.00) | 1 | (50.00) | 2 | (5.56) | 0 | (.00) | 0 | (.00) | 3 | (10.00) |
| | わからない | 2 | (4.00) | 0 | (.00) | 1 | (5.56) | 2 | (4.76) | 1 | (5.00) | 0 | (.00) | 0 | (.00) | 0 | (.00) | 0 | (.00) | 2 | (6.67) |
| | χ^2 | 80.841*** | | — | | 22.659*** | | 69.858*** | | 26.520*** | | — | | 67.539*** | | — | | — | | 38.629*** | |
| いじめ加害者 が行ったいじ めの解決の認 知 | 解決した | 37 | (92.50) | 2 | (100.00) | 10 | (100.00) | 18 | (100.00) | 5 | (100.00) | 1 | (100.00) | 7 | (100.00) | 1 | (100.00) | 4 | (100.00) | 20 | (76.92) |
| | 解決しなかった | 1 | (2.50) | 0 | (.00) | 0 | (.00) | 0 | (.00) | 0 | (.00) | 0 | (.00) | 0 | (.00) | 0 | (.00) | 0 | (.00) | 5 | (19.23) |
| | わからない | 2 | (5.00) | 0 | (.00) | 0 | (.00) | 0 | (.00) | 0 | (.00) | 0 | (.00) | 0 | (.00) | 0 | (.00) | 0 | (.00) | 1 | (3.85) |
| | χ^2 | 116.233*** | | — | | — | | — | | — | | — | | — | | — | | — | | 55.595*** | |
| いじめ認知者 が認知したい じめの解決の 認知 | 解決した | 42 | (67.74) | 8 | (80.00) | 18 | (75.00) | 31 | (86.11) | 26 | (83.87) | 10 | (62.50) | 2 | (100.00) | 0 | (.00) | 3 | (75.00) | 16 | (55.17) |
| | 解決しなかった | 9 | (14.52) | 2 | (20.00) | 3 | (12.50) | 2 | (5.56) | 4 | (12.90) | 4 | (25.00) | 0 | (.00) | 1 | (100.00) | 0 | (.00) | 7 | (24.14) |
| | わからない | 11 | (17.74) | 0 | (.00) | 3 | (12.50) | 3 | (8.33) | 1 | (3.23) | 2 | (12.50) | 0 | (.00) | 0 | (.00) | 1 | (25.00) | 6 | (20.69) |
| | χ^2 | 70.906*** | | — | | 32.120*** | | 73.812*** | | 60.148*** | | — | | — | | — | | — | | 18.960*** | |

Notes. * $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

保護者に相談した者も36名となっており、このうち34件（94.44％）が解決にいたっていた（ $\chi^2=67.539$, $df=2$, $p<.001$ ）。一方、いじめ加害者においては教員（学級担任）に相談した者が40名と最も多く、このうち37件（92.50％）が解決にいたっていた（ $\chi^2=116.233$, $df=2$, $p<.001$ ）。さらに、いじめ認知者においても教員（学級担任）に相談した者が62名と最も多く、このうち42件（67.74％）が解決にいたっていた（ $\chi^2=70.906$, $df=2$, $p<.001$ ）。次いで友だちに相談した者が36名であり、このうち31件（86.11％）が解決にいたっていた（ $\chi^2=73.812$, $df=2$, $p<.001$ ）。また、同級生に相談した者も31名となっており、このうち26件（83.87％）が解決にいたっていた（ $\chi^2=60.148$, $df=2$, $p<.001$ ）。このことからいじめ被害者・加害者・認知者の全てにおいて、教員（学級担任）に相談した者が最も多く、解決にいたるケースが有意に多いことが明らかになった。

(3) 差別意識尺度の作成

差別意識尺度を作成するために、独自に作成した13項目の質問のデータを用いて α 因子法バリマックス回転による探索的因子分析をおこなった。まず、固有値 ≥ 1.0 を基準として因子分析をおこなったところ4因子構造が得られた。このうち因子負荷量が.40未満の項目と、2つの因子に渡って因子負荷量が.40を超えている項目についても内容が不明確であるため除去することにした。そして、残りの8項目について、固有値 ≥ 1.0 を基準とした因子分析をおこなったところ3因子構造が得られた（表7）。

次に抽出された因子の項目について α 係数を算出したところ、第1因子：.719、第2因子：.620、第3因子：.613となり、概ね許容できる信頼性を示していた。さらに、各因子の各項目を観測変数とし、各因子を潜在変数とした仮説的モデルを作成した結果、モデルの適合度は、 $NFI=.930$, $CFI=.952$, $RMSEA=.072$ となり、すべての項目の標準化係数に有意な値が得られた。したがって、差別意識尺度の3因子構造は、因子的に妥当であるとみなすことができる。次に、因子負荷量の高い値を示した項目の内容から、第1因子は「差別撲滅因子」、第2因子は「差別理解因子」、第3因子は「差別容認因子」と命名した。

(4) いじめ経験と差別意識との関係

いじめ経験が差別意識に与える影響を検討するために、いじめの経験を独立変数、差別意識を従属変数とする強制投入法による重回帰分析をおこなった。いじめの経験については、カテゴリー変数であることから被害経験、加害経験、加害・被害経験、認知経験といったダミー変数を作成し、1つの変数「いじめ経験なし」を取り除いて独立変数とした。また、差別意識については3つの下位尺度（差別撲滅因子、差別理解因子、差別容認因子）の合計値を求めて従属変数とした。

重回帰分析の結果、差別撲滅因子においては分散分析 F 値により有意であった（ $F(4, 359)=2.451$, $p<.05$ ）。このうち「いじめ被害経験のみ（ $N=94$ ）」（ $\beta=.142$, $p<.05$ ）において有意な正の影響を与えていた。また、差別理解因子においては分散分析 F 値により有意であった（ $F(4, 359)=7.861$, $p<.001$ ）。このうち「いじめ被害経験のみ（ $N=94$ ）」（ $\beta=.295$, $p<.001$ ）、「いじめ加害経験のみ（ $N=37$ ）」（ $\beta=.222$, $p<.001$ ）、「いじめ被害・加害経験の両方（ $N=82$ ）」（ $\beta=.248$, $p<.001$ ）に有意な正の影響を与えていた。また、差別容認因子においては分散分析 F 値により有意であった（ $F(4, 359)=2.972$, $p<.05$ ）。このうち「いじめ被害・加害両方の経験（ $N=82$ ）」（ $\beta=.155$,

表7 差別意識尺度

| | 因子1 | 因子2 | 因子3 | 共通性 |
|--|--------|--------|--------|------|
| 差別撲滅因子 $\alpha=.719$ | | | | |
| 差別は人間として恥ずべき行為の一つだ | .776 | .079 | -.079 | .614 |
| あらゆる差別をなくすことは大切なことである | .701 | .082 | -.179 | .530 |
| 差別は法律で禁止する必要がある | .523 | .061 | -.234 | .332 |
| 差別理解因子 $\alpha=.620$ | | | | |
| 差別される人の立場や気持ちを理解する必要がある | .195 | .882 | -.122 | .831 |
| 差別する人の立場や気持ちを理解する必要がある | -.085 | .485 | .071 | .248 |
| 差別問題について理解を深めることは大切である | .258 | .444 | .134 | .282 |
| 差別容認因子 $\alpha=.613$ | | | | |
| 差別を完全になくすことはできない | -.097 | .100 | .752 | .585 |
| 能力や適性等によって格差や差別が生じるのは仕方がない | -.265 | .010 | .561 | .385 |
| 因子寄与率（％） | 19.476 | 15.481 | 12.629 | |
| $NFI=.930$, $CFI=.952$, $RMSEA=.072$ | | | | |

$p<.05$)において有意な正の影響を与えていた(表8)。

一方、差別意識がいじめ経験に与える影響を検討するために、差別意識の3つの下位尺度(差別撲滅因子、差別理解因子、差別容認因子)の各尺度得点を独立変数、いじめ経験を従属変数とする多項ロジスティック回帰分析を行った。

その結果、差別理解因子ではいじめ被害経験($-2LL=330.856$, $\chi^2=7.852$, $df=1$, $p<.01$)といじめ認知経験($-2LL=332.449$, $\chi^2=7.454$, $df=1$, $p<.01$)との関連において適合度と有意性とも十分な値を示していた。そして、いじめ被害経験($B=.202$, $O.R.=1.224$, $95\%CI:1.058\sim1.417$, $p<.01$)といじめ認知経験($B=-.186$, $O.R.=.830$, $95\%CI:.726\sim.950$, $p<.01$)において、オッズ比は有意な値を示していた。また、差別容認因子では、いじめ被害経験($-2LL=327.619$, $\chi^2=4.615$, $df=1$, $p<.05$)といじめ被害・加害経験($-2LL=313.776$, $\chi^2=7.279$, $df=1$, $p<.01$)との関連において適合度と有意性とも十分な値を示していた。そして、いじめ被害経験($B=-.153$, $O.R.=.858$, $95\%CI:.746\sim.986$, $p<.05$)といじめ被害・加害経験($B=.225$, $O.R.=1.054$, $95\%CI:1.891\sim1.448$, $p<.01$)において、オッズ比は有意な値を示していた(表9)

表8 いじめ経験が差別意識に与える影響

| 従属変数 | 差別撲滅因子 | | 差別理解因子 | | 差別容認因子 | |
|----------------|----------|-------------|----------|-------------|----------|-------------|
| 分散分析 | <i>F</i> | <i>p</i> | <i>F</i> | <i>p</i> | <i>F</i> | <i>p</i> |
| | 2.451 | * | 7.861 | *** | 2.972 | * |
| R ² | .027 | | .081 | | .032 | |
| 標準偏回帰係数 | | | | | | |
| | <i>β</i> | <i>p</i> | <i>β</i> | <i>p</i> | <i>β</i> | <i>p</i> |
| 被害のみ経験（ダミー変数） | | * | .295 | *** | −.052 | <i>n.s.</i> |
| 加害のみ経験（ダミー変数） | .108 | <i>n.s.</i> | .222 | *** | .032 | <i>n.s.</i> |
| 被害加害経験（ダミー変数） | .045 | <i>n.s.</i> | .248 | *** | .155 | * |
| 認知のみ経験（ダミー変数） | −.024 | <i>n.s.</i> | .066 | <i>n.s.</i> | .077 | <i>n.s.</i> |

Notes. * $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

表9 差別意識がいじめ経験に与える影響

| | 差別撲滅因子 | | | 差別理解因子 | | | 差別容認因子 | | |
|------------------|----------|-------------|-------------------|----------|-------------|-------------------|----------|-------------|-------------------|
| | $-2LL$ | <i>df</i> | χ^2 | $-2LL$ | <i>df</i> | χ^2 | $-2LL$ | <i>df</i> | χ^2 |
| いじめ被害経験のみ(ダミー変数) | 323.744 | 1 | .741 n.s. | 330.856 | 1 | 7.852 ** | 327.619 | 1 | 4.615 * |
| いじめ加害経験のみ(ダミー変数) | 174.821 | 1 | 1.444 n.s. | 176.674 | 1 | 3.298 n.s. | 173.501 | 1 | .124 n.s. |
| いじめ被害加害経験(ダミー変数) | 306.729 | 1 | .232 n.s. | 308.778 | 1 | 2.281 n.s. | 313.776 | 1 | 7.279 ** |
| いじめ認知経験のみ(ダミー変数) | 316.856 | 1 | 1.861 n.s. | 322.449 | 1 | 7.454 ** | 315.226 | 1 | .231 n.s. |
| | <i>B</i> | <i>O.R.</i> | 95% <i>CI</i> | <i>B</i> | <i>O.R.</i> | 95% <i>CI</i> | <i>B</i> | <i>O.R.</i> | 95% <i>CI</i> |
| いじめ被害経験のみ(ダミー変数) | .046 | 1.047 | .943 ~ 1.162 n.s. | .202 | 1.224 | 1.058 ~ 1.417 ** | -.153 | .858 | .746 ~ .986 * |
| いじめ加害経験のみ(ダミー変数) | .092 | 1.097 | .941 ~ 1.278 n.s. | .192 | 1.212 | .978 ~ 1.502 n.s. | .036 | 1.037 | .846 ~ 1.271 n.s. |
| いじめ被害加害経験(ダミー変数) | .026 | 1.026 | .924 ~ 1.140 n.s. | .113 | 1.120 | .965 ~ 1.299 n.s. | .225 | 1.253 | 1.054 ~ 1.488 ** |
| いじめ認知経験のみ(ダミー変数) | -.069 | .933 | .844 ~ 1.031 n.s. | -.186 | .830 | .726 ~ .950 ** | .037 | 1.038 | .891 ~ 1.209 n.s. |

4 考察

(1) いじめの経験

本研究では364名の調査対象者中、いじめ被害のみの経験者、いじめ加害のみの経験者、いじめ被害及び加害の両方の経験者、他人が他人にしたいじめの認知のみ経験者は305名(83.8%)であった。このうち、いじめ被害のみの

経験者、いじめ加害のみの経験者、いじめ被害及び加害の両方の経験者は213名（58.5%）であった。このことについては、ベネッセ教育総合研究所（2003）が大学生に小学校・中学校・高等学校時代の「いじめ」について行った調査結果とほぼ一致していた。このような結果となった理由としては、本研究の調査がベネッセ教育総合研究所（2003）のいじめ調査と同様に、大学生を対象とした回顧調査であることが考えられる。

いじめを経験した時期については、いじめ被害経験、いじめ加害経験、いじめ認知経験の合計は中学校1年生で最も高い値を示し、高等学校段階になると急に減少していた。このような傾向は、文部科学省（2016a）の平成26年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」の学年別いじめの認知件数と一致しており、本調査の結果を裏付けるものと考えられる。

経験したいじめの様態については、被害・加害・認知経験ともに、言語的（暴言、脅し、冷やかす、からかい、陰口、あだ名など）、社会・ネットワーク的（仲間はずれ、無視、〇〇菌、ネットいじめなど）の2つの様態で全体の69.9%を占めており、教員の目からなかなか見えづらい様態がいじめの7割を占めていることが明らかになった。一方、教員の目から比較的発見しやすいいじめの様態である身体的（暴力、ものをぶつけるなど）、物的（ものを隠す、こわす）、強要的（たかり、やらせ、ストーカー、金品の要求）、性的（ズボン・スカートおろし、スカートめくりなど）いじめは、全体の29.6%となっており、このことから教員がいじめを認知することは非常に難しいものと考えられる。このことは、いじめの発見のきっかけのうち「アンケート調査など学校の取組により発見」が51.4%（前年度50.9%）が最も多く、続いて「本人からの訴え」17.2%（前年度17.3%）、「学級担任が発見」11.8%（前年度12.1%）となっている文部科学省（2016b）の調査結果を裏付けていると考えられる。

いじめ被害者が回答したいじめの加害者については、同級生が139名（74.33%）であり、同期生18名（9.63%）となっており、いじめ加害者の83.96%が同年代であることが明らかになった。一方、いじめ加害者が回答した、いじめ被害者についても同級生が96名（84.21%）であり、同期生4名（3.51%）となっており、いじめ被害者の87.72%が同年代であることが明らかになった。いじめの認知者が回答した、被害者と加害者は、同級生が同級生に対して行ったいじめが203件（81.85%）であり、同級生が同期生に対して行ったいじめが5件（2.02%）となっており、83.87%のいじめが同じ学級内や同年代で発生していることが明らかになった。このことは、いじめの発見のきっかけのうち「学級担任が発見」11.8%（前年度12.1%）（文部科学省、2016b）が教員による発見のうち高い数値となっていることや、いじめられた児童生徒の相談状況が「学級担任に相談」が74.7%（前年度73.6%）と最も多いことと関連していると考えられる。このことから、いじめの解決にあたっては学級担任のいじめを認知し解決する能力の向上が必要となると考えられる。一方、被調査者が同級生という言葉と同期生という言葉の意味を混同して回答している可能性、小規模校のため同級生は存在するが同期生は存在しないなどといったこともあり、同級生が多くなる傾向もあると考えられるが、このことについて本調査では十分な調査を行っていなかったため明らかにすることはできなかった。

(2) 経験したいじめの相談者と解決

いじめ被害者が相談した相手は、教員（学級担任）、友達、保護者の割合が多く、教員（学級担任）に相談した場合で88%、友達に相談した場合で90.48%、保護者に相談した場合で94.44%が解決にいたっていた。一方、いじめ加害者が相談した相手は、教員（学級担任）の割合が多く92.50%が解決にいたっていた。また、いじめ認知者が相談した相手は、教員（学級担任）、友達、同級生の割合が多く、教員（学級担任）に相談した場合で67.74%、友達に相談した場合で86.11%、同級生に相談した場合で83.87%が解決にいたっていた。いじめ認知者が相談した相手のうち教員（学級担任）に相談した場合で、解決にいたった割合が低いことについては、当事者でないことからいじめについて報告したものの、解決に至ったか否かについてはわからないと回答したものが17.74%となっており、いじめといった現象の見えにくさが原因となっていると考えられる。

このように多くのいじめは、教員（学級担任）をはじめ、友達や保護者に相談することによって解決にいたっており、現時点で解消しているいじめの件数の割合（文部科学省、2016b）と一致している。このことから、現行の学校現場でのいじめ防止のための機能は有効に働いていると考えられる。しかしながら、相談をしても解決に至らなかったケースもあり、今後さらにいじめ防止対策を検討していく必要がある。

(3) いじめ経験と差別意識との関係

いじめ経験が差別意識に与える影響を検討したところ、いじめ被害経験は、差別をなくしたいと考えていることが明らかになった。また、いじめ被害、いじめ加害、被害・加害の両方の経験は、差別について理解を深める必要性があると考えていることが明らかになった。また、被害・加害の両方の経験は、差別を容認する傾向に影響を与えるこ

とが明らかになった。一方、差別意識がいじめ経験に与える影響を検討したところ、差別理解の必要性への認識が高いほどいじめに被害を受ける傾向があるのと同時に、いじめを認識しなくなる傾向があることが明らかになった。また、差別を容認する傾向が高いほどいじめ被害を受ける傾向がなくなり、いじめ加害者となる傾向があることが明らかになった。このことから、差別意識といじめは、相互に増幅させる関係にあり、いじめ問題を深刻化させていると考えられ、差別意識を払拭させる取り組みが教育現場では必要となると考えられる。

(4) まとめと課題

本研究の結果、いじめ経験の相違（被害のみ経験、加害のみ経験、被害・加害経験、認知のみ経験）によって差別意識への影響の仕方が異なり、差別意識の違いによりいじめ経験が異なることが明らかになった。これらの研究成果を学校現場が実際の指導場面に活かせるよう、今後さらに研究を進め、臨床場面での活用に結びつけられるよう指導方法について検討をしていく所存である。

引用文献

- ベネッセ教育総合研究所 (2003). 「いじめ」の残したもの, モノグラフ・小学生ナウ, 23(2).
 <<http://berd.benesse.jp/shotouchutou/research/detail1.php?id=3341>> (2017年1月1日)
- 文部科学省 (2016a). 平成26年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」について, 文部科学省初等中等教育局児童生徒課
 <http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/28/03/1367737.htm> (2017年1月1日)
- 文部科学省 (2016b). 平成27年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」(速報値)について, 文部科学省初等中等教育局児童生徒課
 <http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/28/10/1378692.htm> (2017年1月1日)
- 大原さつき・田中謙 (2015). 学校におけるいじめ内容の特徴に関する研究—大学生に対する回顧調査を通して—, 教育経営研究, 1(1), 76-89.
- 山田智之 (2016). キャリア教育とシチズンシップ教育でいじめを予防する, 平成27年度上越教育大学いじめ等予防対策支援プロジェクト事業成果報告書, 19-22.
- 代々木ゼミナール (編) (2014). 大学入試難易ランキング (2015), 代々木ライブラリー

The relationship between bullying and perceptions of discrimination

Tomoyuki YAMADA* · Keiichi SEKIMOTO**

ABSTRACT

In this study, the relationship between bullying and discrimination was investigated. A retrospective survey was conducted with university students by using a questionnaire inquiring about their bullying experiences in kindergarten, elementary, junior and senior high school days. The results indicated that differences in bullying experiences, such as only having been bullied, only having bullied others, having both experiences, and just having recognized bullying, affected their understanding of discrimination. Conversely, differences in their perception of discrimination also affected their bullying experiences. There was strong relationship between perceptions of discrimination and bullying. It was indicated that the sense of discrimination is a factor making problems related to bullying more serious. It is important to try to sweep away the sense of discrimination from children at schools.

Keywords: Bullying, The sense of discrimination

* School Education ** A former prof Teikyo University